

出藍文庫

4-1

東方×和歌合同
「ことのは」

近藤貴弥 編

目次

春（十四首）	五
夏（四首）	十一
秋（六首）	十三
冬（五首）	十九
しのぶぐさ（嘉月なを）	二三
帰依仏竟（神威・JT）	二七
蓬萊人恋歌（水鐘）	三一
河童川歌合（藍もどき）	三五
注釈	三九
後書き（近藤貴弥）	五五

春
十四首

一 若葉ゆれ そよぐ夏風 里駆けて 駆ける子らに笑みの木漏れ日 霊鈴

二 竹数え 瀬の筋伸びて 後残り 愛で尽くしてや 躍る学舎 ひととせ

西行寺幽々子、西行妖を見上げて溢す

ジャム

三 花咲くや 郷は錦を 纏ひしも 墨染の枝の この花咲くや

四 求代の花の都をおきながら 鈴な庵を誰かたづねむ ぼんきち

詠み人知らず

五 久方のあま天吹くこち東風に うちなびき 心を寄さむ こがねひぐるま

久我暁

罪の花

六 花咲きて 一摘みしては 繰り返し 川越長く 捌く加賀の実

ひととせ

七 主には桜の餅を奉れ 我が楼に降る花の雪

ぼんきち

八 石桜 桜の下に 春つらら 散りて星降り 杯に波

ひととせ

九 赤緑 しばしとどめん円盤を 雲の通り路青空の影

ぼんきち

十 てぐるまよ 梅て塵は 水底に 咲けよ久しく 蓮花はすはなみたき

ひととせ

十一 花衣 赤白黒と連なりて 恋色の夢想いまどろむ

ぼんきち

稗田阿求、春雨を浴びる花を見遣りて一首

十二 久方の 雨浴ぶ落ちる 花の色 二人揃って また見れるかな

近藤貴弥

我が秘封倶楽部の未来は明るい

ひととせ

十三 蓮台野 夢違えては ヒロシゲよ 天の川から サナトリウムも 共に歩みて

A・レポートです

ひととせ

十四 蓮台野 夢違えたら ヒロシゲね 天の川見て イザナギ取って 次は何やら
(五七五七七七の仏足石歌体により、共に字余りならず)

夏
四首

東風谷早苗、外の世界を懐かしむ

ジャム

十五 放課後の 誘い合つての 寄り道も 休み時間の おしゃべりも

ラムネの瓶の 泡のよう 浮かびはじけて 消えてゆき 今は香りを 残すだけ

忘れてしまった あの人も 私のことを 忘れただろうか

反歌

ラムネ瓶 ビー玉の音を 響かせて あの人の声 こうだったかな

十六 山深い 清水に遊べば 思い出す 青い水底 塩素の香り

ジャム

十七 坂多く 蚤増え体 赤かれど 湖に見る 百々の笑顔よ
ひととせ

湖畔にて、夏の夜ルナサが提琴ひくを聞きて大妖精の詠みし歌

久我暁

十八 みじか夜の 過ぎゆくままに ゆく水の ゆほびかなりて 流るべらなり

藤原妹紅、眠れぬ夜に一首

近藤貴弥

十九 短夜の 流星願う 夢のこと 静かに眠る 常夏の花

秋
六首

二十 秋の滝 眺めし友と夕日飲み 進めし歩み 紅く染め笑む

靈鈴

二十一 秋の着る 穢のころも 神録す 静かな風に 舞うは紅

ほんき

ち

伊吹萃香と星熊勇儀、月の民について語り合う

ジャム

二十二 不死と聞く 月の民とて 何ぞあらめや 照る月を 盃に落とす 我飲み干さむ

稗田阿求、名月を鑑賞して一首

近藤貴弥

二十三 天の原 ふりさけ見れば 先代の瞳に映る 同じ月かな

二十四 業の月 囲いし羽の 儂さよ 意伝わらずと 宵統べ微笑う

靈鈴

二十五 このはなは 春に咲くやとめでたれば もみぢしたふは 秋いぬる日に 嘉月なを

冬
五首

冬の忘れ物へ、四季の花の主人がおくりし歌

久我暁

二十六 夏知らぬ 君に見せむと たてまつる 氷室に眠る 王者の花を

二十七 しろたへの雪の庵に紙魚の音ながながし日々をひとりめぐらん

町田一軒家

二十八 龍臥せて 東風待たずして 欲湧きつ 巫女は湯の爛 神や御霊も

ひととせ

藤原妹紅、稗田阿求の屋敷にて一首

近藤貴弥

二十九 年の瀬に 火鉢囲いて 語る夜 来春歩む 同じ道かな

三十
たまきわる命のさいげつくらやみのみちのはてでわれ泣きにけり

町田一軒家

しのぶぐさ

嘉月なを

三一 物病みのうさを思ひて竹叢に いなばを見なばことなからまし

三十二 うたかたの消えてしづめる時の間にみくづとなりて郷に流るる

三十三

おちかた
彼方は

ゆめまほろし

夢 幻の住む郷と

あなたの夜にききいでて

日なみに遊ぶ我なるも

心にかける忘れじの

けやけう君の目にうつる

さかひの先に逸られて

行く末思ふ人知らず

帰らぬものとなることを

えや思ほしく 希ふ

こひねが

こなたにあれと念ずれど

なほいもの背は遠くなるめり

反歌

宇佐の目に忘れさするなあがほとけ
こなたの郷に身をとどめなむ

歸依仏竟
神威
、
JT

妖獸寅丸、命蓮寺に帰依して詠める

三十四 惑ひ居て 色は今日こそ見えにけれ

道無き沼の白蓮の花

白蓮、見越入道を調伏して詠める

三十五 小さきと見しは己のうつしみぞ

弱き心を見越し入道

白蓮、舟幽霊を調伏して詠める

三十六 みなみつる おきのむらさめやみたりて

雲間より差す金剛の日を

命蓮寺門徒、仏事の際に尼公を評して詠める

三十七 御仏の胸に抱かれて往生す

むべほうようと人の言ふらむ

蓬萊人戀歌

水鐘

妹紅との出会いを詠める

三十八 竹林に巡り逢いたるかの人は竹と語らる姫にあらぬか

慧音との出会いを詠める

三十九 望まぬも人の縁はままならず笹の朝露皆消えるのに

妹紅との日々を詠める

四十 長旅に疲れ苦しむ君癒やすこの竹花に我もなれば

慧音との日々を詠める

四十一 願わくは千代に八千代の末かけてさひはひ満つる日々の続かば

輝夜、妹紅に送る

四十二 蓬萊に生きる我等に人の世の夢を生きるはなおも難けれ

辞世

四十三 朝露の消えにける今去る時の名残を末に留め置かまし

慧音に返歌を詠める

四十四 君と見しこの竹花は忘れまじ罪に汚れし身の滅ぶまで

河童川歌合

く抜粹

藍もどき

河童の住む、妖怪の山から流れる川の畔にて行われた歌合より、月を題とする贈答となった八首を抜粹する。

四十五 きりさめの
あかきつきよに
そでひつる
あまのいわとを
ひらきたるべし

紅月

四十六 かえりこぬ
はなのちりたる
うきよには
ただありあけの
つきぞいでけり

西行寺女

四十七 つきいづる
ふじのたかねを
かえりみて
にくきことより
あはれなること

妹紅

四十八 ちはやぶる
かみはいづこに
おはすべし
ながめながめて
つきのしづみて

風祝

四十九 いどおけの つちにもぐるは ねたましき つきをさとするは ほむらのからす

四天王勇儀

五十 みをつくし うきよのなみに ききにけり さやけきつきの あしはらにてる

船頭

五十一 もちづきの ねやにありなむ ただひとつ つゆにもみえず こよりたぐりき

布都

五十二 かぜふかば しらすのつきも みえぬなり のろしあげつる そでをしほりて

天邪鬼

注

釈

春

一 初夏の風が若葉をゆらして人里を吹き抜ける中、風に負けずに里を駆けてゆく子供達に、夏の木漏れ日を受けながら微笑む慧音。

二 竹を数えるように丈を数え、瀬が作る筋が伸びるように背が伸びる。そんな結果を小刀で削って成長の記録をつける。そのツクシのように成長する姿は芽が出る植物のように愛くるしい。そんな、学舎で子供らが躍っている日常であった。

三 や・問いかけの助詞。

春、錦のように華やかな幻想郷とは裏腹に色の無いままの西行妖。例え千年経ってもその様子に慣れることはなかった。

四 阿求は名門稗田家のお嬢様。鈴奈庵に遊びに来てくれることなんてあるの？ 遊びに来るわよ、だって私は小鈴の友達だもの。私は小鈴が頑張ったことを知っているわ、意味としてはそんな感じになります。

元ネタは枕草子の「頭の中將の、すずるなるそら言をききて」其の式より。清少納言が友人である齊信から『蘭省花時錦帳下』、下の句なくんだ？』という手紙に対し『草の庵を誰がたづねむ』とかえました。

送られてきたのは「白楽天詩集「廬山の草堂 夜の雨に独り宿す」の第三句。

五

「九重の花の都をおきながら 草の庵を誰かたづねむ」。本来なら「貴方は花の都で豪華絢爛な毎日、私は一人草庵にいるわ（廬山雨夜草庵中）」だったのが少納言により「こんなところに誰が来てくれるのかしら？」というニュアンスが含まれました。九代目阿礼乙女と貸し本屋の娘、文学が繋げた身分を越えた友情。

○東風……東から吹く風。ふつう、春風をいう。ここでは東風谷早苗のことを指す。うちなびく……(田) (草・髪などが) なびく。(用心が、ある方になびく。○む……推量の意味。さだらう。○こがねひぐるま……「黄金日車」とも書く。黄金向日葵のこと。ここでは風見幽香のことを指す。

妖怪の山から吹き下ろされる春風になびいて、思いを寄せてしまうのだろう、太陽のように輝くあのひまわりの花は。

六

花が咲いた。それは人の魂が乗り移った花だ。人は、何度も花摘みをするかのよう
に罪を繰り返す。その結果として、三途の川を渡るのが長くなってしまふ。加賀の実
(鏡) を捌く(裁く)のも、長くなってしまふ。

七

白玉楼に咲き誇っていた桜花がざあっと散って雪のよう。縁側から見えるその景色
に、かの異変を思い出しながら、幽々子様のお部屋におやつのお餅を運ぶ妖夢。

楼の訓読みはたかどのです。

八

怨霊が桜の下で石桜に変わりつつあるその頃、気の早い石桜が地底にまで降りてき

て地底の岩盤に顔を覗かせて、春に氷柱を作っていた。その石桜もやがて砕け、星が振るような彩りを見せていた。そしてその星は、花見酒の杯に波紋を打つ。

九 青ベントラーは帰って、どうぞ。

十 聖輦船よ。梅が塵となって水底に沈んだように、お前も埋められ、往時の面々も散り散りになってしまった。次に咲く時は長く久しく咲いてほしい。お前の聖である、白蓮のように。

十一 花衣は花見をしている人の服を指す言葉。霊マリがうたげのあとに寄り添ってうつらうつらしているような、そんな感じですよ。

紫目線かな、多分。

十二 ○久方の…枕詞。「雨」にかかる。

あの花が散り、また春を迎えると再び花開くように、私達もまた二人揃って見れるのでしょうか。

十三 蓮台野に行ったら、次はリアルとバーチャルを考えたいと思います。その一環として、高速新幹線ヒロシゲに乗りたいと思います。なあに、天の川もサナトリウムも一緒よ、メリー！

十四 首都近郊とはいえ田舎に行つて、そうかと思えば変なこと考えて、お次はヒロシゲえ？ 天の川だつて見たし、イザナギ物質だつて発見した。一体、次はなんなのやら

……。
夏

十五 幻想郷では飲み口も全てガラス製のラムネ瓶がまだまだ現役だと思われる。そんな瓶とビー玉の音が、昔のことを思い出させている。

十六 幻想郷で水遊びとなるとプールではなく川遊びとなるだろう。今までは当たり前だったプールの塩素の香りがしないことに、ふと新鮮さとプールの懐かしさを覚える。

十七 幻想郷、妖怪の山には坂が多い。それほどに酒がある為に、まるで蚤に襲われたかのように宴会で体を赤くしてしまった。守矢神社の湖に映っているのは、そんな宴会の参加者面々、百々と桃のような可愛らしい天子の笑顔であった。

十八 ○提琴……ヴァイオリン。○ままに……につれて。○ゆほびかなり……豊かで広々としている。○べらなり……推量の意。ゝするようだ。○ゆほびかなりて 流るべらなり……これは、『知音』の「湯湯乎若流水」を踏まえている。

短い夏の夜、ルナサさんの弾くヴァイオリンの音色が聞こえてきます。夜が過ぎゆくにつれて、ますます趣深く、まるで豊かで広々とした水が流れていくような音色に聞こえてくるようです。

十九 ○常夏の花…なでしこの異称。○なでしこ…なでるようにかわいがっている子の意

で、愛し子。

二十

短夜を流れる星に一刻でも早く眠られるように願っている私の隣では、撫子が静かに眠っているよ。

秋

二十一

楳にとりが滝を見ながら将棋をしている。夕日を茶に映しながら、歩兵を進め、と金に成らせ、ほくそ笑む。そんな日常。夕日と紅葉と、ときの赤を掛けた一首。風神録の秋姉妹です。山が色づき、風に紅葉が舞い、作物が穫るのは山の秋の神様の恵みなんだよーって歌です。

せつかく和歌を詠むのなら秋の和歌は欠かせないなーと思います。風神は原曲も背景も秋らしくて爽やかでとても良いですね。

風で一番好きな弾幕はにとりです。よけてて楽しい。とか書いてたら風神やりたくなっつてつい起動した。

二十二

○何ぞ…なんであるか。なにか。○あら…「存在する、優れている」の意味の動詞「あり」○めや…助動詞「む」の已然形に助詞「や」で反語の意。落とし…落下させる。ここでは杯の酒に月を映す様子だが、陥落させるとい意味もあるか。

幻想郷最強議論で必ずと言っていいほど上げられる月の民について、鬼達が黙っているはずがなかった。二人の鬼は月を肴に飲み比べを始める。

二十三

『和漢朗詠集』二五八番の本歌取り。「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かな」（大空をはるかに仰ぎ見るとそこにあるのはかつて春日の三笠の山に出でいたのと同じ月なのだなあ）。○天の原…広々とした大空。○ふりさけ見れば…広い空間をはるか遠くまで見渡すこと。

大空を仰ぎ見た月は先代の眼に映った月と同じ月なのだろうなあ。

二十四

注釈なし。

二十五

○「このはな」…「梅」のこと。○「このはな…さくや」…コノハナノサクヤビメ。十六夜咲夜につながる。○「木の花」で「栂」下の句の紅葉の話と、犬走栂につながる。○「もみぢ」…「紅葉」と「犬走栂」○「もみぢしたふ」…「したふ」は「色づく」という意味。「慕う」という「思慕する」と掛ける。○「いぬる」…「去ぬる」と「犬」

梅の花を誉めそやすのは春の日のことですが、

一方で、紅葉の色づく美しさは秋の去ってゆくところに楽しみます。

さながら咲夜さんも（犬つながりで）栂さんも、それぞれに愛でるようにね。

冬、

二十六

○冬の忘れ物…レティ・ホワイトロックのこと。○四季の花の主人…風見幽香のこと。○む…意志の意味。くよう。○氷室…冬の氷を夏まで貯蔵しておく、日

のあたらない山かけの穴ぐら。○王者の花……向日葵のこと。与謝野晶子の「髪に挿せばかくやくと射る夏の日や王者の花のこがねひぐるま」を踏まえた表現。

冬にしか現れることのないレティ・ホワイトロックよ、夏を知らない貴女に贈ろうと思います。氷漬けにしたひまわりの花を。

二十七 ○しろたへの…雪にかかる枕詞。○めぐらん…時を廻るとページをめくるをかけている。

外は雪が降り積もり、私は庵の中で本をめくりながら日々を過ごしている

二十八 博麗神社にある臥龍梅は、春風がふいて梅が活気づく前に、根付いた枝から神霊が出てくる。だが折しもその時。博麗神社の巫女は裏手にある温泉で湯の温度にした爛を飲んでいた。臥龍梅から出てきた神霊も、つい、それに惹かれてしまった。

二十九 年の瀬に火鉢を囲い阿求と話す夜。正月も正月を終えた後の春も今と同じように一緒に歩むのだらうなあ。

三十 ○たまきわる…命にかかる枕詞。○さいげつ…歳月と碎月をかけている。○みち…道と未知をかけている。

人の人生の果てより長い歳月の先、月のない真つ暗な夜で私は一人泣いている。

しのぶぐさ

三十一 ○「うさ」「憂さ」「宇佐」の掛詞。宇佐はここではお宇佐様の素い幡のこと。○

「いなば」…「往なば」「因幡」の掛詞。

病の辛さを悩んで、お宇佐様を思いながら、竹林に行く私だが、その幸運の因幡ウサギに会えたなら、もう心配することなどなくなるのだがなあ。

三十二
○「うたかたの」…「消ゆ」を導く枕詞。○「みくづ」…「水屑」と書く。水に漂うゴミのようなもの。「しづむ」「流る」と関連づくかも。○「郷」…ここでは「幻想郷」のこと。○「流るる」…連体終止。「配流」などの意味があり、ここでは忘れられたものが流れ着くという意味。

三十三
○「彼方」…境界の向こう側のこと。○「あなたの夜」…「この前の夜」という「あなた」○「けやけう君の目」…境界を見ることのできるあなたの不思議な目、メリーの目のこと。○「行く末思ふ人」…メリーの将来を心配する人、蓮子のこと。○「えやゝ希ふ」…「えや」と連体形の結びで、反語表現。「どうしてそうなってほしいと願うだろうか、いや、ない。」○「遠くなるめり」…遠くなっていくみたい。メリー。めり。なんちゃって(酷)。○「宇佐の目」…宇佐見蓮子のこと。○「忘れさするな」…幻想入りすると、現世から存在が消えてしまうので、そうさせないでほしいという意味。

境界の向こう側は、夢や幻の住んでいる世界だと、あの夜に知ってから、毎日のように境界探して遊ぶ私だけど、心配しているのは大切な、不思議な目を持つ

君のこと。

その目に見えている境界の向こう側に夢中になるあまり、私の心配も知らずに、向こう側の妖怪になってしまふことを、どうして私が望むでしょうか。(いやない)ここにいてほしいと心で願っているけれど、それでもあなたの背中では遠くなっているみたい。

私に大切なあなたのことを忘れさせないで。どうかこちら側にいてほしいの。

帰依仏竟

○道無き沼……浮世の例え。

三十四

○うつしみ……「映し身」「現身」の掛詞。○見越し入道……「見越入道」と「見越し・入道」の掛詞。○入道……原義は「仏道へ入ること・入った人」。または「坊主頭の化け物」。掛詞なので両方の意味。

※筆者(神威・JT)の設定では、一輪と雲山がセットで「見越入道」という妖怪であり、この歌もそれを前提としている。

三十六

○みなみつる……「水蜜」「皆見つ」「水満つる(↓おき)」の掛詞。○おきのむらさめ……「沖の村雨」「隠岐のムラサ」の掛詞。○水満つる沖の村雨……ムラサの心が恨みに荒れ狂っている様。○金剛の日……金剛石の輝きの如き日の光。ムラサが仏法帰依を決意したことの比喩。金剛石の性質は仏教用語にもよく用いられる。

三十七 ○ほうよう……「抱擁（ほうよう）」「法要（ほふえう）」の掛詞。○むべほうよう

と……「吹くからに秋の草木のしをるれば むべ山風を嵐といふらむ」（文屋康秀）
本歌取りという程ではないが、意識。

蓬萊人恋歌

三十八 慧音と妹紅の出会い。竹林の中にいる美しい妹紅をかぐや姫と錯覚する。

三十九 皆自分を残して逝ってしまうので、友人を作ることを望んではいけない。長年孤独

生きてきた妹紅はそう考えているのではないか。

四十 竹の花は約百年周期で開花する。あまり目にする事がない物である。なお、あまり

綺麗な物ではないが、そのほうが却って妹紅は氣にいるのではなからうか。

四十一 「千代に八千代」で慧音の長寿を祈る歌となる。慧音がいれば幸福に満ちた日々となるのだ。

四十二 蓬萊人の定めを知るのはまた同じ蓬萊人である。輝夜から妹紅への警告である。

四十三 慧音の辞世。去る時とは共に歩んだ日々のこと。妹紅の言う通りに朝露のような存

在ではあったが、共に歴史を刻んだ。

四十四 何百年後かに竹の花を見て、慧音に返歌を返している。永遠に忘れることはない

という思いを歌う。

河童川歌合

四十五

歌合二二六番歌。紅魔館当主レミリア・スカーレットによる。彼女の妹であるフランドールに寄せた一首。

「あまのいわと」は天照大神の故事による。長きに亘り、地下に幽閉されていたフランドールをさす。よって「ひらきたる」の「たる」は完了の助動詞。

四十六

歌合二二〇番歌。冥界にある白玉楼の主、西行寺幽々子の一首。

「はな」は桜。「うきよ」は掛詞で、冥界の外つまり「幻想郷」と、ク活用形容詞「憂し」連体形から「辛い世の中」を示す。

四十七

歌合二二三番歌。竹林に住む藤原妹紅の歌。この歌合で彼女はこの一首のみ。

「にくきこと」は彼女の仇敵である蓬萊山輝夜のことであり、「あはれなること」は友人である上白沢慧音のこととする論（鈴奈文学大系9「稗田和歌集」と、双方とも輝夜に対する二律背反する感情を示すとする論（紅魔館文学全集10「稗田和歌集」）がある。

また、山部赤人の「田子の浦ゆうち出でてみれば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ」を本歌とするか。

四十八

歌合二四三番歌。妖怪の山の神社の巫女である東風谷早苗が詠人。

「ながめながめて」は、守矢神社が幻想郷へやって来た経緯を踏まえての掛詞。妹紅の「ふじのたかね」を受け、「(高い場所から) 眺め探して」という意味と、「悩みに悩み抜いて」という意味が示される。

四十九

歌合二五一番歌。河童の技術により、地底より通信で参加した星熊勇儀の作。

地霊が博麗神社に出来た間欠泉より溢れだすという異変に於いて、解決に向かった巫女と魔法使いが弾幕を交わした順に、地底に棲む妖怪を並べたのみで構成される、折句の一種。

下の句にて、地底の妖怪という特異な地位と、そこに至るまでの慟哭が示されるといふ論(虹川文学集成12「稗田和歌集 上」)がある。

五十

歌合二五四番歌。舟幽霊である村紗水蜜による。

古来より「みをつくし」は「航路の道標」と「身を尽くす」の掛詞となる。

「あしはら」は「葦原」であり、船の行く川辺と人の生きる現世を示す「あしはらのなかつくに」を表す掛詞。

「さやけきつき」は明るい月のように「闇の世を照らす」という意味が付されており、命蓮寺の住職に寄せた歌とわかる。

五十一

歌合二五五番歌。神霊廟に暮らす物部布都の歌。

二句目まで序詞。「なむ」は係助詞。受けは省略されている。

五十二

「こより」は「細い紙の糸」を意味するが、鈴奈文学大系18「仙人往還」月報にある詠人の談話によれば、ともすれば千切れやすい「政道」の糸と、細いものの力強い「蜘蛛の糸」、そしてとある人物の「一筋の髪」という三つの意味を付しているとする。

歌合二五六番歌。歌合最後の歌で、通りすがりの鬼人正邪の作。

「しらすのつき」は、白く輝く月という意味。

「のろし」は恋に焦がれる煙（集成12）とも、まだあきらめきれない革命への思い（大系9）とも言われている。

後書き

東方×和歌合同「ことのは」をお買い上げいただきありがとうございます。こうして、さも当たり前のように主催として筆を執り、後書きを書いておりますが、当合同の主催は僕ではありません。参加者の一人でもある霊鈴氏です。氏から、「和歌で合同誌を作りたい」と相談を受けなければ、この合同誌はこうして日の目を見ることはありませんでした。氏の思いを受け、合同誌を頒布するまでに行わなければならないことに不慣れな氏の代わりを承りました。

それがこうして、沢山の詠み手が集い、和歌が詠まれ、一冊の合同誌になったのは、ひとえに参加者の皆様のお陰であり、霊鈴氏の熱い思いが実ったためでしょう。参加者の皆様へ、謝辞を申し上げます。

注釈を最後にまとめて掲載しておりますのは、言葉の意味や修辭よりも、まずは和歌という詩歌そのものの感触を味わってほしいためです。意味を知り、その和歌を好むこともあると思いますが、意味も何も分からないがその和歌を好む、ということがあります。その感動を一つでも多く味わってほしく、注釈を後ろに回しました。

最後になりましたが、発起人である霊鈴氏から預かっている和歌を掲載いたします。

幕開き 挙げし詠声 高く澄み 拡げし宴 宵越し忘れ 霊鈴

我が友に捧ぐ返歌二首 近藤貴弥

願はくば 君と再び会はんとす ひととせ過ぎも一人待つなり

便り読み 互い煩ふ心うち 語らふ時に似ても似つかぬ

二〇一六年 四月中旬 近藤貴弥

とうほうわかごうどう
東方和歌合同「ことのは」

発行日 2016年5月8日 初版

原作 東方 Project（上海アリス幻楽団）

印刷 ちよ古つ都印刷製本工房

発行者 こんどうたかや
近藤貴弥（出藍文庫）

連絡先 stkk7.920521@gmail.com

執筆者

霊鈴

藍もどき（東方天翔記 CPU ダービー処）

ひととせ（四季堂本舗）

町田一軒家（多摩の END はいつも町田市！）

水鐘（おさつプリン）

久我暁（青猫幻想団）

喜月なを（アトリエ YUMEnoZUKA）

神威 - JT（カムイコタン）

ジャム（音の瓶詰）

ほんきち（真夏の雪だぬき工房）

本書の無断転載・複製・無断販売等を禁じます。